特別企画３

植民地台湾における日本人農業移民ー坂口䙥子の移民三部作をめぐって

李文茹*

はじめに

植民地台湾文壇で活躍する作家の中で、坂口䙥子(1916～2007)は数少ない日本人女性作家の一人である。戦前までの坂口の作品はおよそ三つのタイプに分類することができよう。一つ目は台湾人家庭や植民地者としての台湾人の様子を描くもので、二つ目は私小説風のようなもので、三つ目は台湾に移住した日本人農民たちに関する題材なのである。本論は主に三つ目の日本人農業移民について考察を行うのである。

同じ時期に台湾で活躍するほかの日本人作家と比べると、坂口の作品の特徴は女性描写にあるといえよう。男性作家が中心となっている台湾文壇の中で、坂口は自らの女性性を用いながら、女性を描写している。たとえば、「春秋」(『台湾時報』、1941.9.1)と「黒土」(台湾放送局応募小説、1940.11)は台湾に移住した女性の農耕の苦労と郷愁を描写し、「灯」(『台湾文学』、1943.4)は夫が軍隊に徴集される妻を描いたものである。また作品集『曙光』(台北：盛興出版部、1943.12)に収録された「破壊」(「台湾新聞」1940.12. 4 ・ 7 ・11 ・14)は、「不潔な血」に悩む少女を、「曙光」(『台湾文学』、1943.7)は農業移住者、とくに女性の中に存在する微

＊ 淡江大学日本語学科助理教授。

교보문고 KYOBO Book Centre

妙な人間関係などを描いている。このように坂口はさまざまなタイプの女性を通して、植民地における日本人女性の生活を作品化している。

坂口襧子の終戦までの作品では内台融合や台湾原住民のほか、日本人農業移住民を扱った、いわゆる移民小説が大きな位置を占めているが、同じ題材を扱い台湾文壇で発表された浜田隼雄の「南方移民村」[1](海洋文化社、1942.7)は研究対象としてよく取り上げられているのに対し、坂口の移民小説は看過されている。[2]

坂口は1938年に渡台し、本格的に作家として台湾で活躍し始めたのが太平洋戦争開始の前年1940年である。[3] 当時の台湾文壇では内台融合や皇民化政策などを題材にした作品が多く発表されていたが、このような風潮のなかで、日本人農業移住民を題材とした坂口の作品は珍しい存在といえよう。

坂口の移民小説は戦争の激化につれて、明るく積極的に厳酷な時代を克服する態度への変化が見られる。ここでは戦争から積極的な一面を見出す態度を、戦時下におかれた坂口の戦争観として捉える。だが、このような移民小説のなかにある戦争から希望を見出す思想は、被植民者たちに発信するものであり、その裏側には日本人労働者女性に対する偏見のまなざしが働いている。本論では坂口の移民三部作「黒土」(台湾放送局10周年懸賞小説、1940.11)、「春秋」(『台湾時報』、1941.3)、「曙光」(『台湾文学』、1943.7)を分析の対象に取り上げながら、銃後の内地人農業移民村を描くこれらの作品は、戦時下の台湾社会においていかなる意味があるのかを究明し、さらにそこから、戦時下の日本人女性作家と植民地との関係を考察する。

---

1) 1941.10~1942.6まで『文芸台湾』に9回に亘り連載されたが、中断となった。1942年7月に海洋文化社により単行本『南方移民村』が日本で上梓された。

2) 坂口の移民小説に関する先行研究はいくつかあるが、その大多数は詳細な作品分析を行わなかったり、作品の紹介にとどまったりするものである。例えば、黒川創「洪水の記憶」(『国境』、メタローグ、1998.2)はそれである。そのほか、大原美智は移民小説として「黒土」と「春秋」を取り上げているが、なかでも作品の紹介に止まっている(『坂口襧子研究 – 日人作家的台湾経験 –』(台湾：成功大学歴史研究所修士論文、1997.6)

3) 1939年3月、気管支炎で熊本に帰った。1940年4月坂口貴敏と結婚するため、再び台湾に渡った。

교보문고 KYOBO Book Centre

1. 内地人社会における階級問題

坂口が移民小説を題材にする契機は、作家個人の経験に関係していると思われる。官営移民事業の実施により成功を収めた台湾東部地方の花蓮、台東などと比べると、坂口が住んでいた西部地方、とりわけ台中州は台湾全体の中で農業移住民が少ない地域であった。1917年にいったん中止になった移民事業は15年後の1932年に再開された。当時、内地人農村の建設が東部地方ではすでに実験済みだったが、西部地方では新しい試みであった[4)]。1936年に内地人農業移民10ヵ年計画が実施され、1937年に台中州北斗街及び渓州庄内の濁水渓(ダクスイケイ)新生地は移住地域として指令され、また募集予定地域は九州、中国、四国及び台湾島内であった。[5)]

坂口は1938年に台中州北斗郡(現、彰化県北斗鎮)で教鞭をとった。北斗郡は1937年に農業移民地と指定され、そこに移住してきたのは九州、四国及び中国より募集した農業民たちである。加えて九州出身の坂口にとって、九州からの農業移住民は格別の親近感があると想像できよう。このように、坂口の作品に九州から北斗郡に移住した農業民が多く登場しているのは作家の実体験と無縁ではなかろう。

坂口の移民三部作の中でいくたびも強調されているのは農業移住民たちの苦労である。坂口は肉体的な苦労と、精神的な苦痛を通して、植民地に渡ってきた農業移民を描いている。

まず、肉体的な苦労について見てみよう。坂口の移民小説に登場する人物は、全て内地で生計を維持するのが困難なため、日本以外の場所に新天地を求める農民である。しかし、新天地に夢を抱いて渡台した移住民たちは必ずしも幸せになるとは限らず、それよりむしろ絶望的な光景に唖然とした人たちが多い。

> 台湾の移民には、殆んど九州中国四国が多く、門司から台湾航路の汽船に乗り込むのが、八割くらいもあった。彼等は船の中で、土地を割当てられた。それは全

4)『台湾時報』、1937.3、pp.2-3。
5)『台湾時報』、1937.1、p.186。

교보문고 KYOBO Book Centre

く未知の土地であつた。そして、そこにすでに運、不運が判然と区別されてゐたことを、彼等は自分達の土地へ着いて初めて覚らされた。(略)最初の日から思はぬ苦労にであつた移住民達は、見知らぬ人と見知らぬ土地で毎日失望を重ねていつた。最も大きい失望は何といつても土に対する失望であつた。彼等は、自分達の前に、これがお前の土地だと示された広い土をまぢまぢと見ながら、あまりにもその広漠としていることに、背筋の寒くなるような悲しみを覚えた。(略)父と子と孫との生活は、ここによりどころを求めてゐるのに。彼等は呆然として何処までもつゞく砂地に立ち尽くした。然しそれが、すべての人に与えられた失望でない事がわかってくると、彼等は失望から怒へと変わっていった。たった一本の紙のくぢが、彼等の運命を決定したのだと思うと、彼等は、黒土のしめりの中に、すでに種をまき終えた、同じ移住民の他部落の幸運を憤るのであった。

(「黒土」、pp.177-179)

やや長い引用になるのだが、ここでは、移住民たちの不安な気持ちや自らの運命が簡単な籤引きで決まってしまうことへの憤慨、新天地に期待と夢を托した農民たちの突き落とされた絶望的な心境のみならず、移住民たちの互いに対する複雑な心境までも切実に描き出されている。

日本における過剰人口調節及び貧農救済政策のもとで開始された農民移植事業は、台湾の場合、主として甘蔗栽培を目的とする糖業資本によって企画されたため、農業移住民は資本主義企業の労働力でもあった[6)]。台湾全島各地において払い下げられた開墾地を無償で分配されたものの、糖業企業の搾取があるため、移住当初、農業民は安定した生活を営むのが極めて困難であった[7)]。そのような現実を、坂口は次のように描写している。

田地として与へられたものは、すでに本島人の手によつて一期作が作られ(略)これが実り刈り取られて初めて彼等の権利が発生するのである。それまで三月ある。そして、彼等の手に任せられたとしても、黄金色の穂波をみる迄には又四月余りあ

6) 矢内原忠雄「日本帝国主義における台湾の地位」『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』、岩波現代文庫、2001.8を参考

7) 移民たちに配られた土地の多くは台湾総督府が台湾人農民から強引に徴用したものであった。しかし坂口の移民小説では、土地を奪われた台湾人(本島人)農民への観察、同情が描かれていない。

교보문고 KYOBO Book Centre

るではないか。移住民にとつて苦しい半年であつた。彼等の生活は内地から持つてきたわずかばかりの金と収穫を見越して製糖会社から借入れる甘蔗の肥料代、奨励資金などによつて、からくも支へられる。月々と少なつてゆく持金と共に、体の細まるやうな思ひであつた。

（「黒土」、p.179）

台湾に到着してからの移民たちがおかれた苦境のみならず、資本社会の犠牲者としての農民の様子も坂口は見逃さなかった。農耕地を所有しても最初の収穫ができるまで少なくとも半年ほどの時間がかかる。それまでのあいだ、農民たちは糖業会社から借金をするか、僅かな移民奨励金をもらったりするかしか生計を立てられなかった。借金利息の返済に苦しめられた部分は明白に書かれなかったとはいえ、糖業資本に搾取された農業移住民の立場が上の引用からうかがえるのである。

土地と糖業資本によって生じてくる困難な生活のみならず、坂口の移民小説では移住民の複雑な心境も描かれている。

早くから移住してきてゐる内地人の多くが、官公吏であり、教員であり商人であつてみれば、自らそこには、一つの内地人としてのポーズができてしまつてゐるので、彼等が、農民として地についた仕事をしてゆく上には、そのポーズを乗越へる勇気がいつた。本島人は、内地人を一つのタイプにまとめて考へる癖が出来てゐるので、移住民達が、本島人の最もいとふ労働をする者であると言ふ事は、自分達と同じ人であると言ふ親愛を感じる前に、侮蔑と嘲笑を浴びせかけるのである。移住民の、農民としての生活の、軌道をはづしたものの産まれる必然性があそこにあった。農業は苦力にまかして、自分達は、別な仕事を求めるような、移民本来の使命を逸らした生活様式が、其処に展開されていった。（略）何時田植が始まり終ったものやら、知らない女が多かった。そして、彼等はそれをむしろ得意としている自分達の、錯誤を少しも気付かなかった。

（「春秋」、『台湾時報』、pp.109-111）

日本社会の下層階級に属する農民たちが、台湾移住をきっかけに虚栄心や体面の問題から農民としての自分の位置に疑問をもち始める。さらになかには植民

교보문고 KYOBO Book Centre

者としての体面を守るため、苦力(クーリー)を雇用し本業である畑仕事を放棄する人も出てくる。このように完全な植民者になりきれないジレンマを坂口は農業移住民から観察し、またそれによって植民地における日本人移住社会の中でも、社会階級が細分化されていることが提示されているのだ。8)

坂口もその夫の貴敏も教職員であった。教職を務めるエリートの彼ら／彼女らにとって、台湾では数少ない農業移住民は下層階級に属する存在となるのだ。そこで、農業移住民のジレンマに関する描写は、上位に属する植民者と下位に属する被植民者、この両者のあいだに存在する絶対的な権力関係を示唆するものだと思われる。これについてはのちに詳細に論述する。

植民者の苦労以外に、郷愁の題材も移民三部作のなかで漂っている。しかし興味深いのは「黒土」で語られる移住民たちの郷愁、苦労などの悲哀な部分が、のちに発表される「春秋」のなかでは次第に表立ってこなくなることである。さらに「曙光」にいたると、戦争が国民に課す使命を強調することによって、郷愁の感傷が完全に「お国のためのご奉公」に昇華してしまう。次は移民三部作の中で郷愁はどのように表象されているのかを考察する。

2. 色あせてゆく郷愁

移住民にとって最も耐えがたいことの一つは故郷への思いで、それは坂口の移民三部作のなかでも重要なモチーフである。この節では坂口の移民三部作における郷愁の描き方の変化を作品の発表順にそって比較分析を行う。

坂口の最初の移民小説「黒土」は、「台湾放送局十周年文芸」の当選作である。作品に登場してくるマキ一家は、制限された日本国内の土地でいくら農耕に励んでも増収にならないことに苦悩して移住を考えだしたのだが、その彼ら／彼女たちが最後に選んだのは、当時、大勢の人が赴く満州ではなく、自らが住み慣れる九州と同じく気候的に温暖な南国の台湾だった。

8) 植民地における帝国側の社会階級の細分化について、富山一郎「熱帯科学と植民地主義 -「島民」をめぐる差異の分析学」(酒井直樹ら編(1996) 『ナショナリティの脱構築』、柏書房)を参照。

교보문고 KYOBO Book Centre

同じく「生活に疲れ、土地にしがみついてゐる寄生虫のやうな哀れ」な農業移住民であるとはいえ、ある者は、将来が見えない生活に目を瞑ろうとするようにやけ酒に溺れ、ある者は苦労に耐えられず再び故郷へ戻ったりするが、それとは対照的にマキ一家は激しい労働に耐えながら農耕に励んでいる。しかし肉体的な苦痛を耐えられるとしても、郷愁の情緒は抑えきれるものではない。そこでマキ一家は、故郷の母から脚気を予防するために送られた故郷の土を自らの畑に撒き、耐えがたい郷愁を慰めるのである。故郷と新天地の「土」をめぐって作品は次のように描いている。

> 故郷とつながりができたのである。南の果の国に、彼等が骨を埋めやうとしてゐるこの土に、ふるさとの土が混じつたのである。マキが手のひらにすくひとつて嘆いたふるさとの土である。菜の花の一ぱい咲いた、白い冷たい霜の置いた土である。目に見へぬ縁、の切ないまでにかなしい結合である。
>
> (「黒土」、p.183)

郷里の土を用い脚気を防ぐことは「ふるさとの土地を恋ひ慕ふ人間の弱みを救つてくれる感傷的な迷信」であるが、農民ならではの土への愛着として表象される郷愁は、農業移住民の切なさをリアルに物語っている。「黒土」は虚しく切ない郷愁に包まれて幕をとじる。

「黒土」に引き続き発表された「春秋」は内地人教師の雪子の目を通して、農業移住民、加世一家の郷愁を描く作品である。加世一家は熊本より台湾に移民してから既に３年が経った。植民者の面目を保つため、すべての農作業を苦力に任せる大多数の農業移住民たちと違って、加世一家は苦力を雇用しながらも、植民者の虚栄心を捨て自分の手で畑仕事をする。このような加世夫婦は「内地人の百姓魂を植付けに来ている」という使命感を強く抱くのみならず、戦中に不足している米の増収に尽力することを通して自ら農民としての「奉公」を実践しようとしている。しかし懸命に自らの畑を耕作しても故郷への思慕は絶えるものではない。「春秋」のなかでは土着信仰(鎮守様)を通して農業移住民たちの郷愁が描かれている。

교보문고 KYOBO Book Centre

老母は、移住民の生活に、拠り所を持たぬ者の哀れさ淋しさを見たのである。老母は、何か満たされぬもの、どうしても落着かぬ自分の魂の不安さの原因が、何であるかを、老人の一途さで考へつづけた。そしてふと部落の周囲を見た時、其処には、信仰と安心の拠り所であるお宮もお寺もなかつた。(略)魂の拠り所を持たぬ移住民の生活は、我慢のならない不安さである。内地を恋しがり、内地へ帰りたがるのも、信仰を通しての魂を通してのつながりが此処にないからである。

(「春秋」、pp.125-126)

確かに精励し荒れた土地を立派に開墾し永くそこに住み着けば、自然に植民地台湾での生活の根が広がる。だが、それにしても、台湾で土着信仰を持たない農業移住民の魂は永遠に「宙に浮いて」おり拠り所を得られないと描かれている。解決の糸が見つからないまま、「春秋」は「黒土」と同じく郷愁の感傷のなかで物語が終わる。

「曙光」になると、語りつづけられてきた農業移住民たちの切ない郷愁は、銃後建設によって解消されてしまう。「曙光」は若い男女二人(順と品子)の淡い恋を描きながら、農業移民村における複雑な人間関係及び銃後建設の様子を描写する作品である。もし「黒土」と「春秋」とを植民地に移住したばかりの農民の開墾物語とすれば、「曙光」は移住地に定着後の農業移民村及び移住民の第2世代を描く作品だいえよう。前述したように坂口の移民小説の前2作は切ない郷愁のなかで幕が閉じられる。「曙光」も同様に郷愁の感傷に浸る作品であるが、異なっているのは感傷の中から積極的に脱しようとする移住民の姿が現われてくるところである。

此の土地にこの土に、この砂の中に、自分を埋めやうと固く決意して、安らかなる者が何人であらう。彼等の多くが、金をつかんだら内地に帰らう、生まれ故郷に帰つて、やり直さう、とソハソハしてゐるのではないか。二十年、三十年後に、兎に角、死ぬ前には内地に戻らうと大方の腰が浮いてゐる。それは、感傷ではないか。そのような感傷に引きづられる者が、出稼ぎのつもりでやつて来たこの村なら、一そガラガラとくづれるがよい。この村は、この土地は、骨を埋め、血を注ぎ涙で固める、村人の命そのものでなければならない。感傷に耐へて、この土に自分

교보문고 KYOBO Book Centre

の墓を立てねばならぬ。理屈なしにこの土地に死ぬのだ。すれば(ママ)、子も孫も曾孫も、つづくのだ。自分等一代が、故郷への思慕を断ち切れば、自らつづくのだ。その時、この村は故郷になるのだ。

(「曙光」、pp.142-143)

「黒土」のなかで農業移住民と植民地との関係が、「土地にしがみついてゐる寄生虫のやうな哀れ」で結合するものだと述べられている。それに対し「曙光」のなかで農業民の移住地に対する帰属意識、心境に大きな変化が見られる。それは「目に見へぬ縁、の切ないまでに悲しい結合」という心境から、子孫の「故郷」として移民村を建設しようという境地に達する心理的変化である。初期の移民小説のなかでしきりに語られている痛切な郷愁は「曙光」になると消失しつつある。

「曙光」の主人公である品子と修は、内地で成長したため、故郷への未練は簡単に消えることはない。そこで、修は自分一代から故郷への思慕を切断すれば、次の世代からはここが故郷になるため、捨てがたい郷愁は自分一人の中に収めればよいと考えるようになる。郷愁の感傷を諦観するなかに銃後建設に奮闘する意図がうかがえる。したがって郷愁は大東亜戦争の激化とともに次第に消えつつあると同時に、植民地の土地を開墾する力に転換して、さらに彼ら／彼女らは戦争から積極的な一面を見出そうとしている。

戦の庭に、神業が行はれる神国日本であるから、この土地で、この村でこの人々の上にも、自らな、然し激しく厳しい変化が行はれたのであらう。戦果の報道のある度に一枚づつ脱いでいつた着物であつたらう。裸に近付くにつれて、村人の魂は相寄り相助け、お互ひの体温の暖かさをしみべと感じ合ふ、人間味にふれたのであらう。(略)さう考へてくると、品子は、戦ひに依つて獲たものが、唯物だけではなく、心、である事に、拝みたい程の喜びを感じるのである。

(「曙光」、p.145)

「本能的に、自分を人よりも高くしやうと背のびする移住民たちは、お互ひに助け合う反面他人の欠点にも容赦なかつた」とあるように、封建的な移民村の中の人間関係はとても複雑である。だが、戦争の激化に伴い、村内の複雑な人間

교보문고 KYOBO Book Centre

関係がしだいに単純になるのみならず、村民たちも心を一つにして移民村建設に努力し始める。「戦ひに依つて獲たものが、唯物だけではなく、心、である事」と叫んだ品子の感動からは、戦争によって感動、希望を見出す移住民の姿がうかがえる。また懸命な移民村建設によって、移民たちは捨てがたい郷愁の感傷からも救われる。このように戦争と銃後建設から希望、喜びという積極的な一面を見出そうとする観念を、坂口が抱えている戦争観として捉えられよう。だが、移民村における建設は銃後建設にとどまらず、外地建設、すなわち日本国土の拡張につながることをも看取すべきではない。そこで戦争から積極的な意味合いを見出そうとする坂口の戦争観には、植民地支配に共犯する観念が潜在していると考えられる。換言すれば、移民小説から読み取れる坂口の戦争観は、帝国主義を内面化している坂口の側面を浮き彫りにしたものでもある。

農業移住民の多くは出稼ぎで台湾に渡航したため、彼ら／彼女らの心象風景のなかに内地という故郷が常に存在している。したがって、農業たちは一時的な居場所としか考えていない移民村を自らの土地、いるべき場所だと思わない。しかし、「曙光」のなかでは郷愁の感傷に決別しようとする登場人物・修の思いのなかに、植民地台湾で根を下そうとする覚悟が見られる。例えば、作品では修は品子と共に移民村にいる子供たちの教育に従事し、「お国の御用にたつ子供」を育てる夢を描いている人物として造形されている。

黙々と農作業を行いながら切ない郷愁を抱く「黒土」、「春秋」の登場人物と比べると、これらの初期の移民小説のなかで表象される郷愁、不安などの感傷、いわば消極的な感情は、「曙光」において銃後建設に奮闘することによって払拭されてしまうものとなるのだ。「黒土」から「曙光」にいたるまでの坂口の作風の変化は、戦争の激化に伴いながら生じたものだと言えよう。換言すれば、戦争の意味を疑わなく、希望に満ちた書き方で描かれた坂口の移民小説は、戦時体制に巻き込まれた坂口の側面を物語るものでもあると考えられる。このように、坂口は銃後建設、移民村建設を描くことによって、人々を戦争に動員することに一役を買ったのである。しかし興味深いのは坂口が抱いた「戦争の美学」の背後に労働者女性への偏見のまなざしが隠蔽されていることである。

교보문고 KYOBO Book Centre

３．女性労働者への眼差しと優生学

移民村で生活する女性のあいだにある複雑な人間関係及び心理的葛藤を描くのは、坂口の移民小説の特徴の一つでもある。この節では「曙光」を中心に移民三部作における女性農業移民の描き方の変化を分析し、それによって、植民地における内地人社会の権力構造を究明する。まず、初期の「黒土」から見てみよう。

> マキは、それからの二年ばかりの年月を、肉体的な苦痛で思ひ出すことが出来るのである。激しい労働にハッヘとあへぐやうな年月であつた。肩はその思ひ出に重苦しい圧迫を感じた。足は夜毎に感覚をなくしたけだるさで、肉体を離れた物質のやうに投出された。マキは夜更けに、体がバラへに解体して、そして又、朝組合はされるやうなそんな幻覚におそはれた。(略)内地から来た直後には、美しいほつぺたをしてゐる移住民達が、だんだんへと青黒い肌になつていくのは、生活に疲れ、土地にしがみついてゐる寄生虫のやうな哀れさで、マキには、その中の一人である自分の姿も一緒にして、撫でたりさすつたりしてやりたいやうな感傷である。
>
> (「黒土」、pp.181-182)

ここでは土地の開墾の大変さは肉体の比喩によって強調されている。「黒土」のヒロイン、マキは夫の決断にしたがい、一家をあげて台湾に移住した。マキは九州から台湾に移住するまで、夫に移住についての文句を一言もいわず、また移住してからも献身的に夫と子供の世話を焼きながら畑を耕す。痛切な郷愁に耐えるかたわら、懸命に自らの土地を開拓するマキは銃後社会における理想的な母／妻として造形されるとも言えよう。また「春秋」に出る女性たち(加代とその姑)もマキと同様に畑仕事が上手で温順な女性として描かれる。つまり「黒土」と「春秋」において農業移住民女性は銃後社会における理想的な妻なり母なりとして描かれている。それに対し「曙光」になると、ひたすらに農作業に励む女性は肉体的な労働者にすぎなくなるのである。

> 沢渡の家に比べると、柿迫では唯もう岩乗(クリヂャウ)に手のあるだけ稼せぎま

교보문고 KYOBO Book Centre

くる、と言つた行方であつた。人の二倍以上の仕事を平気でやる貞治(柿迫家の男性主人)と、口八丁手八丁のハギ(貞治の妻)と、六年の義務教育を、義務であるから出るので、それより仕事の方が面白いと言つた、根からの百姓つ子である姉娘の鉄、鉄に比べれば、少しはねつかえり(、、、、)と言ふだけで、よく似てゐる妹の美代。(略)誰も食事の時に話を持出すものはなかつた。腹一杯つめこまふとする食欲だけが触手をのばして、話など思ひみる余裕がない。兎に角このヘリにへつた腹を満たす事だ、と言つた有様である。腹が満たされても、呑気にしゃべつてなどゐる者はなかつた。(略)食べた者から自分の汚れた器を持つて流し場へ行く。そして、さつさと仕事へ急ぐのである。

(「曙光」、pp.91-92)

「曙光」は土地の開拓にしか目が向かない農業移住民の柿迫家を、無知な肉体的な労働者として表現する。注目すべきは柿迫家をめぐる描写に優生学の概念が付随している点である。

戦場に赴く男性が多く、女性の結婚問題が危惧される時代に、柿迫家女主人ソイは我が娘の鉄を村内の優秀な青年、修と結婚させたがっている。しかし同時にソイも「根っからの百姓娘」の鉄より上品でしかも女学校も出た品子に、修が奪われてしまうまいかと心配している。そこでソイは様々な方法で品子を中傷しようとする。しかし品子を誹謗すればするほど、ソイの意地悪さと品子の純潔さが対照的になり、労働者の低俗さと知識人の品格が強調されることになる。さらに優生学というあたかも科学的な根拠に基づくような言説が補足され、労働者と知識人の間にいっそう明白な序列関係が形成される。

劣性の労働者と優性の知識人に差をつける意図は、結婚と優生学をめぐる品子と修の口論から読み取れる。品子は「劣性を救ふ為に優性が結びつくと言ふ事は、優性の堕落」、「先祖への冒涜」だと言い、修は「水平線以下といふやうなものは今考へないとして、私は、優性と結合すれば、半優性に近付く可能性のある劣性を救ふ為に結婚指導と言ふ事は、もつと深く研究されねばならぬ」と言っている[9]。品子と修の間に交わされた優生学と結婚との関係について、両者の論点は異なるものの、「優性」と「劣性」を判断する規準が通底している。つまり「優性」

9)「曙光」、引用はpp.130-131より。

교보문고 KYOBO Book Centre

は品子と修が代表するような利巧な知識人であり、「劣性」は身体障害による規準ではなく、柿迫家の女性たちに代表されるような無知な肉体的な労働者である。このような観点は坂口が抱いた日本人労働者階級に対する思考と関連していることを看過できない。

戦時下に人的資源を確保する目的で結婚報国運動が鼓吹されはじめた。中村幸は十五年戦争時期の結婚と人口増加政策について以下のような見解を示している。「国家目的のための国策結婚は「女性報国の道」、「結婚報国」というスローガンのもとで、新しい時代の結婚」として宣伝した」と。[10] つまり戦争中に奉公の方法の一つとして、女性に結婚が奨励された。とはいえ戦場に赴く男性が多かった時期は女性にとってはまさに結婚難の時代でもあった。したがって、「曙光」において柿迫家の女性たちは結婚に強い願望を示している。だが、品子は彼女らと異なり、結婚に対しては消極的な態度を示している。このような品子はいわば「結婚報国」の道から逸脱する人物なのであろう。

> 女が余つてゐれば、結婚出来ぬ娘もあらう。自分は伯母によつて女学校もへさしてもらつてゐる。移住民の子供達を教へ看て、ゆく、と言ふ道を選んではならぬものだらうか。結婚出来る人は結婚するがいい。私は、戦ふ日本の一隅で自分に出来る一番良い、一番正しい生活を築き上げてゆけばよいのだ。修に今かぢりついて離れるのは嫌だ、といへば、明日にでも結婚出来るかもしれない。然し、私は、私の心に別なものへ差しのべてゐる腕のあるのを知つてゐる。それが、自分に出来る精一杯のご奉公であると信じる。(略)この生活を、私は此処から出発したいんです。この子供達の中に、私は、私が両親から世の中から受け継いだものを、正しく美しく注いでやりたいのです。私はこの子供達に、私なりの夢を見させてやりたいのです。この末だカサへな村に、育つてゆく子供達の清い泉になつてやりたいのです。
>
> (「曙光」、pp.153-154)

教育による精一杯の「ご奉公」に人生の目標を定めた品子は、「お国の御用にたつ子供」を教育することによって夢を失った戦時下の子供たちに、美しい夢を見

10) 中村 幸(2001) 「人口政策の諸相」ー結婚報国をめぐって」(『戦争と女性雑誌-1931年～1945-』、近代女性文化史研究会、ドメス出版)、p.127。

교보문고 KYOBO Book Centre

せてやりたいと決心した。「結婚できるものは結婚するがいい」といった品子の言葉には、女学校出身の知識人としての自負が表れていると思われる。つまり高等教育を受けた自分に子供を教育する能力があるため、畑仕事しかできない労働者女性は結婚による奉公を選択すればよいのに対し、自らが彼女らにできない教育に奉公を果たすことに決めるのである。

知識人としての自負のほかに、結婚を拒否する品子の態度には女性として主体が確立した側面も見られる。中村幸は戦争に課された使命に女性たちはいかに反応したのかを、女性雑誌を中心に調査し次のような結論を出している[11)]。女性は「早婚奨励＝多産報国」に対しては、「承服できない個人感情」をもつ一方、女子教育の普及とともに自我が芽生えたため、従来の結婚についての常識を破りつつあった。中村の論によると、戦時下に従来の結婚・家族制度を疑問視する態度は女性としての主体が確立してからはじめて可能になるのである。

「曙光」で描かれる柿迫家と品子の結婚に対する異なる反応の背後には「生めよ増やせよ」という人口政策のための国策結婚が鼓吹された時代背景がある。結婚に対して、積極的な態度をとる柿迫家と、消極的な態度をとる品子とは対照的に描かれている。そのような描写のなかには労働者女性と知識人女性を差別化する構造が潜在すると思われる。詳細に言えば、柿迫家は戦時下に鼓吹される「多産報国」という結婚政策に応ずるのに対し、品子は子供の教育に献身する生き方を選択し、両者の異なる選択は子供を生む労働者と、子供を教育する知識女性という構図をなしている。「お国の御用にたつ子供」を教育することに献身する品子の描写は、肉体的な労働が一方的に強調される農民女性より格別に美化される理由もそこにあるといえよう。したがって、「曙光」は農業移住民の女性たちの現実的な一面を描出している作品だが、エリート女性／労働者女性という構図によって描かれる移民小説の根底には、移民社会のエリート階級に属する作者が抱えた労働者女性への偏見のまなざしが同時に働いていることは看過してはならないのである。

11）注10に同じ、p.155。

교보문고 KYOBO Book Centre

終わりに ー 移民三部作に見られる内地人社会の権力構造

以上、坂口の移民小説について論じてきた。次に、坂口の台湾文壇における坂口の移民小説の位置づけについて、考えたい。

皇民化運動や同化政策をめぐる作品が台湾文壇のなかで多く発表されているなか、坂口は農業移住民を題材に、移民三部作を発表した。坂口が農業移住民を小説化した動機は二つ考えられる。一つは作家自身の実体験に基づく動機であり[12)]、いま一つはエキゾチシズムに対抗しリアリズムを試行するという台湾文壇を意識した動機である。[13)]しかし、台湾人読者が中心であった台湾において、厳酷な環境を生き抜く日本人農業移住民を題材にした作品にいかなる意味が託されているのかについて、まだ解明されていない。

この問題を明らかにするため、まず、農業移住民が経験してきた時代的な意味を究める必要がある。元来、移住奨励政策は日本国内の過剰な人口を解決する目的で、国家によって開始された政策であった。移植民の募集指定地は食糧問題を抱える地方が多く、それに参加した応募者も故郷で生活難に陥った農民が多かった。しかし、個人差があるにせよ、経済的な理由で新天地を求める海外移住は、太平洋戦争の激化につれて、次第に帝国の植民地支配の最前線に立つ者としての自負をも、一つの契機とするようになる。例えば土地に対する愛着から、農業移民事業が植民地における内地人(日本人)定住策に最良な方法だと主

---

12) 坂口が北斗小学校に勤務したとき、その近辺に日本人移民村、豊里村が建設され、そこで農業移住民の子供を教えた坂口は、よく電話で竹中信子に移民村の生活などを話したそうである(竹中信子 『植民地台湾の日本女性生活史 昭和編 下』、田畑書店、2001.10、pp.207～208)。そのほか、祖父と母親の出身は百姓と関係があるため、農業移住民に対して特別な親近感をもっていたと坂口は垂水千恵のインタービューに答えた。(「坂口䙥子インタービュー －台中と台湾の人々」、台湾：『日中言語文化比較研究』3、1994.12、p.122)

13) 当時の台湾文壇で盛んであったリアリズムとエキゾチリズムをめぐる論争と関係している。例えば、「台湾文壇建設論」(黄得時 『台湾文学』、1941.9)、「坂口れい子の『鄭一家』について--K氏への報告--」(塩見薫 『台湾公論』、1944.1)等々。西川満が代表する『文芸台湾』と張文環が代表する『台湾文学』がそれぞれエキゾチズムとリアリズムを掲げながら対抗していた(柳書琴「戦争与文壇：日拠末期台湾的文学活動(1937～1945)」(台湾：台湾大学の修士論文、1994)、井手勇「決戦時期台湾的日本人作家与皇民文学」(台湾：成功大学の修士論文、1995)等々)。『文芸台湾』に掲載された「南方移民村」と『台湾文学』に掲載された「曙光」についての比較を別の機会に譲りたい。

교보문고 KYOBO Book Centre

張した金澤吉太郎の言論を、農業移植民に植民地支配への協力を要求する代表的な例として見なしてもよいのだ。14)

台湾移住事業の場合は「内台人融合」、「地元民の国民化の促進」、国防上の必要や、台湾の農業経験を今後の南方進出に生かすなど、農業移住民はこれらの神聖たる使命を国家に課された。したがって植民地に渡った日本人農業移住民は植民地政策実践の最前線にたつ移民でもあった。坂口の移民小説に登場する農民は、金沢が主張した農業移住民の使命と同様の責任を要求されており、例えば「春秋」の主人公、順はその典型である。順は、「俺は、台湾に内地人の百姓魂を植付けに来てゐる」とか、「米の増収の急務と、農民の使命」との関係などを説きながら、「この土地は頂いた土地である。自分等のものであつて、自分等のものでない。この荒れた土地を、育てあげてゆき、此処から、幾らでも増収する事を考へ、努める事が、我々百姓の御奉公」だ(「春秋」、p.90)と主張する。「移民本来の使命」を逸脱した農民たちは、順の信念を聞いたあと直ちに感化され、また植民者の「虚栄心」をも捨てふたたび畑仕事に尽力した。

浜田が書いた「南方移民村」と違い、坂口の移民三部作では、郷愁や苦しい生活に耐えられない理由でやけ酒に溺れた農民はあまり描かれていない。彼女の移民小説に登場する人物はすべて郷愁の感傷を抱きながらも、懸命に農作業に努力する農民たちである。対立、争いもしくは自暴自棄などにふれる描写はあるものの、「お国のためのご奉公」によって、農民たちは一つになり移民村建設に励んでゆく。そこから、移民三部作は意図的に移民村における積極的な一面を強調する傾向があるといえよう。加えて戦争が激しくなるにつれて、移民小説もいっそう明るく積極的に変わっていく。つまり坂口は移民村のリアリティを描写しようとしながらも、食料資源などが不足している戦時下の社会に生きる厳しい現実に触れないようにすると同時に、戦争から希望を見出そうとしている。移民小説に見られる、戦争から積極的な一面、希望などを見出そうとする創作態度は、坂口がとった戦争協力と読み取れよう。

また、日本人農業移住民を小説化した意図のうらに、台湾に在住する被植民

14)「最近の本島農業移植民事業梗概」『台湾時報』、1937.5。帝国への協力は主に満州、台湾などの植民地における移民事業を指すものであり、ハワイ、ブラジルの移民事業はその範囲外である。

교보문고 KYOBO Book Centre

者たちに「お国のためのご奉公」に献身しようという呼びかけや励ましが托されるのではないかと推測する。支配者の立場からではなく、下層階級に属する日本人農業労働者という設定を用いることによって、被植民者に近親感を思わせることができ、「お国のためのご奉公」に参与しようという呼びかけがより有効的になると考えるからである。したがって、台湾人読者が中心となっている台湾で移民小説を発表したことは、坂口の作家ならではの「奉公」であろう。

だが、看過してはならないのは移民小説の中から発される戦争協力の信号は、被植民者へのプロパガンダになりうるということである。他方、この戦争プロパガンダの裏には、日本人知識人女性の労働者女性への偏見のまなざしが働いている。つまり優生学の名目で、知識人女性は自分たちを優性のものに、労働者を劣性のものに分化し、その上に「結婚奉公」と「劣性救済」結婚論が織り込まれ、植民者女性による同性への階層分化が創りだされるのである。

坂口は日本人農業移民の辛苦と悲哀を憐憫し、それをリアルに小説化しようとした。しかしその意図は、知識人としての坂口がもっている日本人女性労働者への偏見のまなざしを伴うものでもあった。さらに帝国の下層階級に属する農業移住民を題材にする移民小説は、被植民者である台湾人の同情心を喚起する効果があるため、戦争協力のプロパガンダとしても有効に機能している。したがって日本人農業移住民に対して同情的に語られていると思われがちな坂口の移民三部作は、植民地における内地社会での、女性と女性との間の権力構造を物語るのみならず、植民地支配を内面化している帝国女性の戦争協力の一面も浮き彫りにしているものでもあるのだ。

〔付記〕

1.「黒土」と、「春秋」、「曙光」の引用は『植民地文学精選集　台湾編　鄭一家・曙光』(ゆまに書房、2001.9)によった。

2. 坂口の戦後作品に関しては、拙稿「植民地的「和解」のゆくえ-戦後から70年代までの日本社会における霧社事件文学をめぐる一考察」(『国際日本学研究叢書11異文化としての日本－内外の視点』(法政大学国際に本学研究センター)(2010.3)pp.388-405)も同時にご参照を。

교보문고 KYOBO Book Centre